

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

秋季企画展 全療協60年のあゆみ 10月1日より

全国ハンセン病療養所入所者協議会（全療協）の結成60年を記念して、秋季企画展「たたかいつづけたから、今がある―全療協60年のあゆみ―」を、当館二階企画展示室で開催している。全療協から全面的なご協力をいただき、結成から60年を迎えた全療協の足跡を主に写真と映像とで追う展覧会である。

本展の目的は、今日ある療養所という場所、全療協という組織が、歴史的存在としてある事実を、改めて広く知ってもらうことだ。全療協の取り組みにより、療養所はかつての強制隔離された忌まわしい場所ばかりでなく、入所者自身にとって大切な場所にもなってきた。現在大きな課題となっている将来構想において、療養所の残し方を考える時に不可欠なこの認識は、その歴史がわかれば、より強

たたかいつづけたから、
今がある

く広範に説得力を持つことができると考え企画した。

展示室ではまず、今年5月に松丘保養園で開催された第72回定期支部長会議の会場を模したコーナーを導入として設けた。スローガンや全療協旗を掲げ、長島愛生園自治会からお借りした瀬戸内三園協議会の文書や第一回支部長会

議課題を展示した。

続いて全療協の歴史を写した百枚の写真と、当時を知る関係者の映像を上映するスペースを設けた。写真はほとんどを全療協からお借りした。全療協誕生、らい予防法闘争、らい予防法闘争以後、

看護切替と六・五闘争、生活費の確保、医療の充実、沖縄の「本土並み」、施設整備、らい予防法改正・廃止、国家賠償請求訴訟、熊本地裁判決以後の十一テーマをコーナーとして設定し、それぞれに合致する写真百枚を一万枚以上の膨大な量の中から選んだ。多くが、

その当時の熱を感じさせる写真となっている。

映像は各園にうかがい、テーマごとに13人の方に話していた。撮影は非常に示唆に富んだ興味深いお話しが多く、編集作業でカットしてしまふのが惜しいものばかりだった。結局展示室で見せるには長過ぎると自覚しつつ、合計120分を超えるものができた。全療協は結成以来、半世紀以

上に渡る患者運動の歴史を重ねてきた。その運動の成果が、今日の療養所の姿を形作ってきた。長年運動に関わる回復者が、「要求のないところに成果はない」と語るように、戦後国が実施した政策の多くは、全療協の運動が少しずつ引き出してきたものだった。

その一方で、全療協の歴史は苦悩と苦勞の連続だった。運動は必ずしも常に成功してきた訳ではなく、また不安や迷いによって方針が定まらない場面もあった。そこからは会員である入所者や代表たちの心情的な揺らぎを、垣間見ることができた。その苦悩と苦勞は、今日の目で見ても「本来なら、する必要のなかったもの」とだけ言っ

て片付けられるほど軽いものではなく、当時なりの必要性から生まれている。それは今日の入所者の人生に、それを支える価値観や決断や生き方として続いており、いかに本来的には不当・不要だったとしても、現実には大きな意味を持つている。入所者が療養所を大切に思う理由は、単に長い時間を過ごしたからではなく、積極的に苦しみ努力してきた自分たちの足跡が、刻み込まれた場所だからだろう。そして苦しみながらもそれを刻みつけてきたのが、全療協運動なのだ。

(2面につづく)

参議院裏の坐り込み（昭和28年）



第72回支部長会議 (松丘)



会期 二〇一一 (平成23) 年10月1日 (土) ~ 12月27日 (火)
協力 全国ハンセン病療養所入所者協議会 ※会期中、11月の毎週土曜日午後1時から3時まで、当館映像ホールで全療協に関係のある方による講演会を開催します。詳細は追ってホームページ等でお知らせします。

シンポジウムの目的は「ハンセン病やエイズなどの人権について、シンポジウムや演劇を通して学び、差別や偏見を乗り越え、すべての人が『共に生きる』ための、より良い社会づくりに貢献すること」(ちらしより引用)である。
プログラムは浜松市立高等学校合唱団による合唱、主催者代表挨拶、シンポジウム、沖繩の子どもたちによる演劇、フィナーレは大合唱である。
シンポジウムのパネリストは池間哲郎氏 (NPO法人アジアチャ

賑わう盆踊り



18時からは20分間の花火の打上げ、これを目当てに地域の人たちは昼頃から道路にシートで陣取りをし、次々と打ち上る花火に歓声をあげていた。花火のあと21時までまた盆踊りが行われたが最後まで踊りの輪が途絶えることはなかった。明るいうちから交通整理にあたった東村山生き活きまちづくりの方や、音頭取り、消防署等のボランティアに関係者は深く感謝している。

基づいている点で、その時代ごとに、何が課題だったのかを知ることができるとは必ずである。そして、どのようにして乗り越えてきたのか、なぜ、どれほどの苦悩を抱え苦勞を払ってきたのかがわかるだろう。将来構想を考える際、全療協運動が積み重ねてきた成果と、くり返してきた苦悩と苦勞について、国も支援者も、理解しておく必要があるはずだ。
全療協が運動体として、いかなる必要性に基づいて、いどのような取り組みを展開し、成果を手にしてきたのかはもちろん、国、社会、そして自分たち自身とさえたたかいつづける中で苦悩と苦勞をくり返してきた人間の集団としての側面にも、ぜひ目を向けてい

ただきたい。そこから、入所者や療養所とこれからのように関わっていくべきなのか、療養所を生活と医療の場として、あるいは史跡・資料として残していく必要性がどこに由来しているのかについて、来館者が考えてくださることを期待している。



昭和47年の総決起集会

ハンセン病問題に関するシンポジウム 第11回は浜松で

今年で11回目を数える「ハンセン病問題に関するシンポジウム」沖繩からのメッセージ」が、静岡県浜松市にて11月5日(土) 午後1時30分より開催される。会場は浜松市福祉交流センター(JR浜松駅より徒歩10分)。主催は厚生労働省、法務省、静岡県、浜松市、全国人権擁護委員連合会。共催は全療協、国立駿河療養所、NPO法人HIV人権ネットワーク沖繩、静岡県法務局、静岡県人権擁護委員連合会、公益財団法人日本科学技術振興財団。

イルドサポート代表理事)、小鹿美佐雄氏(駿河療養所駿河会会長)、花井十伍氏(NPO法人ネットワーク医療と人権理事)。石井則久氏(ハンセン病研究センター)を司会とし、ハンセン病やエイズをめぐる人権について討論を行う。

演劇は、本シンポジウム恒例となった沖繩の子どもたちによる「光の扉を開けて」である。予約不要、入場無料。団体での入場は要問い合わせ(ハンセン病問題に関するシンポジウム事務局 TEL〇五四・二五四・一九三七)。

全生園で納涼祭 地域との交流深まる

東日本大震災の影響で沈滞ムードの中、「景気回復のため元気を出せ!」と、東北をはじめ各県で夏まつりが再開された。

17時30分からは一般の福引が行われたが、長蛇の列で千本のくじは30分程でなくなつた。

恒例の多摩全生園納涼祭は8月4日(木) 学園グラウンドで開催された。15時30分より入所者の福引、

唐揚げ、焼そば、たこ焼、生ビール、ジュース、玩具などの模擬店には次々と客が詰めかけ賑わつた。18時からの盆踊りは高齢化で入所者の参加が減少する中、今年は見学者、介護員、看護学校の生徒さん60人余りが、そろいの絆纏や浴衣姿で参加してくれ、踊りの輪が華やかで一段と盛り上つた。

18時からは20分間の花火の打上げ、これを目当てに地域の人たちは昼頃から道路にシートで陣取りをし、次々と打ち上る花火に歓声をあげていた。花火のあと21時までまた盆踊りが行われたが最後まで踊りの輪が途絶えることはなかった。明るいうちから交通整理にあたった東村山生き活きまちづくりの方や、音頭取り、消防署等のボランティアに関係者は深く感謝している。

学芸員が五月から七月まで 光明園、愛生園で資料調査

5月から7月にかけて、邑久光明園と長島愛生園の実物資料調査を行った。この事業はハンセン病対策協議会での合意に基づいた厚生省からの依頼で昨年度から行われている国立療養所13園での資料調査の一環であり、それぞれ4園目、5園目となる。

【邑久光明園】

5月24日から27日まで園内展示場で巡回展を実施し、学芸員の西浦直子・稲葉上道・田代学が滞在し入所者へのパンフレット配布と

来場者への対応を行った。また資料展示室と資料が収蔵されている「かえで会館」（旧看護学校）を見学した。この期間中、西本願寺会館の鐘や火鉢、作業道具等の資料を提供していただいた。

続いて6月21日から27日まで実物資料の実測・撮影・リスト作成を行うため、学芸員の西浦直子・金貴粉・田代学が園内に滞在した。始めに資料展示室の写真、生活用具、文化活動関係の展示資料（全三百二十点）の実測・撮影・リスト作成を終えた。次に「かえで会館」収蔵の看板類や生活・作業用具の実測・撮影を行い、二百十三点の資料についてリストを作成した。

今回は合計五百三十三点の資料について調査したが「かえで会館」収蔵資料の三分の二ほどは実測・撮影を終えていない。また園内には生活用具や作業道具などが散在していることがわかった。「かえで会館」内の残りの資料のリスト作成を行うとともに、散在している資料の調査も今後の課題である。



実測・撮影を終えた資料（邑久）

福祉課前での巡回展（長島）



【長島愛生園】

5月31日から6月3日まで福祉課窓口前で巡回展を実施し、学芸員の黒尾和久・稲葉上道・田代学が現地に滞在し入所者へのパンフレット配布と来場者への対応を行った。また長島愛生園歴史館の田村朋久学芸員から資料の保管場所である恩賜記念館と曙地区の一舎の案内を受けた。この期間中、入所者から個人所蔵の文書、長島猛虎会の旗、仏壇などの資料を提供していただいた。

続いて7月4日から13日まで実物資料の実測・撮影・リスト作成を行うため、学芸員の黒尾和久・田代学が長島愛生園に滞在し、曙地区の一舎に保管されている資料

群の実測・撮影作業を浴場大広間において行った。収蔵されていた愛生座歌舞伎の小道具、作業道具、長島観測所の文書資料、カセットテープや原稿、写真パネル、油絵などに加え、この調査中に提供していただいた木彫作品や図書資料なども含めて計五百十三点の資料のリスト作成を終えることができた。

同所には他にも生活資料、羽衣会関係資料、楽器などが収蔵されており、これらの資料の実測・撮影とリスト作成が必要である。

邑久光明園・長島愛生

園には展示施設があり、すでに膨大な量の資料が収集されていた。今回の調査ではこれらの資料のリスト作成が主作業となった。しかしながら個人から提供していただいた資料には貴重なモノも多く、お寄せ頂いている情報からは記録されるべき資料や史跡が他にも多く残されていることがわかった。今後も入所者のみなさんから頂いた情報を大切にしながら資料調査を行っていきたい。両園については、追加調査を今年の秋冬に予定している。

八重樫信之写真展

「輝いて生きる」



る「国賠訴訟判決から10年」が、当館1階ギャラリーにおいて開催される。NPO法人IDEAジャパン後援。

八重樫氏は国賠訴訟から長くハンセン病回復者の写真を撮り続けてきた。判決10周年を迎える今年、そのあゆみを展示する。

入場無料。問い合わせは八重樫信之氏 TEL 〇九〇・七四二二・二〇五二まで。

10月1日より10日まで、八重樫信之氏による写真展「輝いて生き



高齢化した入所者 米寿以上が4分の1

多磨

暦の上では9月19日(月)が平成23年の「敬老の日」となっているが、多磨全生園では一足早く9月14日(水)13時よりコミュニティセンターにおいて、敬老の日の記念式典が開催された。

入所者262人中、式典に参加できる70歳以上の対象者は243人で、70歳以下はわずかに29人となった。今年の米寿(88歳)対象者は10人(男7人、女3人)、喜寿(77歳)対象者は7人(男3人、女4人)、89歳から102歳までの長寿対象者は55人(男28人、女27人)である。



松谷園長、佐川自治会長の挨拶、渡部東村山市長のお祝いの言葉があり、来賓の紹介、つづいて米寿の人に園長、自治会長、市長より赤いチャンチャンコ、レイ、記念品が贈られた。喜寿、長寿の方に

も園長、自治会長より記念品が贈られた。館山看護部長の音頭で乾杯があり、二部では志田自治会副会長の司会で上宮保育園児の歌、どんぐりころころ、あの青い空のようにあり、その後園児たちは舞台を降り、おじいちゃん、おばあちゃんたちのもとへ駆けよった。

今年5月1日、全療協が調査したところ、全国13園の入所者数は2275人(男1152人、女1123人)で、男がわずかに29人多くなっている。かつてハンセン病療養所はどこでも男が多く、その比率は男2、女1の割合であった。ところが高齢化と女性の長命者がふえ、その差が徐々に縮まり、現在では男が多い園は5園、女が多い園が8園と逆転してしまった。昭和49年から51年までの3年間の一日平均入所者をもとに、昭和

てこれまで入所者自治会は東村山市とともに国などに陳情してきた。佐川会長は「国の政策で子どもを持つことができなかった私達入所者は、子どもたちの元気な声を聞くことを楽しみにしている」と挨拶した。

8月25日、市内八坂神社宮司の司式で全生園内「花さき保育園」新園舎新築工事地鎮祭が挙行された。午前10時から全生園内建設予定地において、佐川多磨自治会長を始め、松谷全生園園長、新保育園理事長、工事関係者等多数が出席し、厳かに執り行われた。

保育園は、定員130人を目標とし、来年4月の完成を目指している。

花さき保育園新園舎 来春開園目ざして地鎮祭

来春開園目ざして地鎮祭



撮影ポイントを探し、後遺症で不自由になった指で必死にシャッターを切り続けた結果、1万点もの作品を遺され、伊藤さんの「生きた証」となりました。ギャラリーでは、代表作22点を展示しましたが、さすがに力のある作品ばかりで、来館者からも「素

8月27日から9月25日まで、1階ギャラリーにおいて、「伊藤秋夫写真展」を開催しました。伊藤秋夫さんは福井県出身。22歳でハンセン病と診断され、一九五一年に邑久光明園に入所、一九六一年に駿河療養所に転じ、昨年4月に亡くなるまで暮らしました。生前、伊藤さんは、晴天の日には、早朝・深夜を問わず、愛車を駆り、四季折々の富士山と草花、風景を撮影し続けました。

富士山に魅せられた 伊藤秋夫写真展

55年(一九八〇年)時点で作成した「ハ病患者の将来推計」によると、補正を入れても二〇一〇年は1841人と予測している。しかし現実には二〇一一年でも2275人と434人も多く残っており、

高齢化により500人位のずれがあるようだが、平均年齢が90歳、百歳ということは考えられないので、5年先、10年先には入所者は急速に減少することも予測される。



晴らしい」「信じられない」という賞賛の声ががりました。開期中には、展覧会開催に多大なご協力を頂いた奥様の節子さんをはじめ、駿河療養所の皆様も来館し、秋夫さんの人柄を偲びつつ作品を観覧しました。今後資料館では、寄贈された額装写真のみならず、節子さんが保管している秋夫さんの作品等をお預かりし、その整理作業に着手する予定です。